

スポーツの多様化における相撲のあり方

Ideal way of sumo in diversification of sports

下川 隆司*, ニツ森 修*, 屋田 敏弘*, 小山 泰文*
佐藤 和裕**, 下川 学***, 下川 哲徳****

Takashi SHIMOKAWA*, Osamu FUTATSUMORI*, Toshihiro OKUDA*
Yasuhumi KOYAMA*, Kazuhiro SATO**
Manabu SHIMOKAWA*** and Tetsunori SHIMOKAWA****

Abstract

Participants of the sumo have kept decreasing, and the Shin-sumo that was newly born has not shown a big extension yet either. Becoming to the expected Olympics the participation item having become uncertain, too came to put a further spur on the depression of the sumo. However, it is a decrease in participants and the serious one is diversifications of the sporting event any more. The situation of the sumo especially looks serious on such a difficult situation though any sporting event racks one's brains. However, only the root sumo where it sits has the strength in reserve that firmly faces out the age of the diversification by the position gripping the opponent's belt in the tradition culture of long Japan.

はじめに

人々の価値観の多様化が著しくなり、それとともにスポーツの多様化も進んでいる。派手なスポーツウェアに身を包んだ新しいスポーツが数多く紹介され、話題となっている。相撲は裸体に廻しを締めるだけであるから、そこに派手さをもとより求めるべくもなく、古臭くて地味なものとして、新しいスポーツの潮流に取り残されてしまっているように見える。相撲の競技大会は、年々参加選手が減る一方で、しかも、大きな大会でさえ、ほとんど観客のいないところで開かれているような状況である。価値観の多様化という、かつて我々が経験したことのなかった新しい時代に、今後相撲はどうあるべきなのか、新しいスポーツの現状とともに考察した。

* 国士舘大学 (Kokushikan University)

** 道都大学 (Dohto University)

*** 東京純心女子大学 (TokyoJunshinWomen's College)

**** 杏林大学 (Kyorin University)

1. 相撲人気の盛衰

その始まりを有史以前に求めることができる我が国の伝統格闘技である相撲は、20世紀の終焉を迎えるころから大きな岐路に立たされている。相撲人口の減少が著しくなり、それとともに、相撲人気が大きく後退してきたのである。

その原因は、これまで関係者によって、さまざまな面から指摘されてきたが、もう一度、スポーツの多様化という現代のスポーツ事情を踏まえて、その中で相撲の現状と課題を考えてみよう。

まず、かつて我々が経験したことのない少子社会（注1）の著しい進展が挙げられる。

2003年の合計特殊出生率（注2）は1.29と戦後最低を記録し、その後も改善の兆しは見えない。人口置き換え水準とされる合計特殊出生率の値は2.08とされ、このまま、少子化が進行すると、2007年からは日本の総人口が減少に転じると予測されている。また、出生数の推移を見てみると、第一次ベビーブーム期（1947～1949年）の年間出生数は約270万人、第二次ベビーブーム期（1971～1974年）は約200万人であったのに対し、2003年の出生数はおよそ112万人だった。この数字だけを見ても、次代を担う子どもの数が、尋常でない速さで減少していることは、誰の目にも明らかである。そして、スポーツ競技の予備軍でもある、このような子どもの減少は、相撲に限らず、スポーツ競技全体の人口の減少をもたらすこととなっている。

こうしたことに加えて、スポーツ競技の多様化がある。1950年代から60年代は「巨人・大鵬・玉子焼き」という流行語に象徴されるように、野球と相撲が絶大の人気を誇っていた。スポーツの極集中ならぬ二極集中の時代だった。しかも、その人気はプロ野球や大相撲を観戦するだけでなく、子どもから大人まで野球や相撲を自ら行って楽しむ人たちが大勢いた。当時の小学校にはたいい土俵が築かれ、第1学年から第6学年まで学年ごとに決められた相撲の指導要領（表1）に基づいて、体育の授業が行われた。

国民体育大会（国体）の競技数を例にとって見てみると、1960年に開催された第15回大会の競技数は33競技であったのに対し、今年（2005年）の第60回大会では43競技と増えている。さらに、現在も国体への参加を希望する競技種目が数多くあるが、主催者側では、運営などの関係から極力参加を抑制している状態である。また、戦後初の第1回大会の全体の競技数は26競技であったが、そのうち野球は、軟式野球、高校野球、実業団野球、ソフトボールの4競技を占め、ここからも、かつての野球人気の高さを伺い知ることができる。最近の両競技の人気の低迷を考え合わせると、まさに隔世の感を覚えざるを得ない。

スポーツ競技の多様化は、各競技種目への参加者の分散をもたらし、そのうえ、子どもの数が減少することから、単に相撲だけでなく、どのスポーツ種目においても、競技参加者の減少は深刻な悩みとなっている。中学校や高等学校の運動部で、

表1 1958年の小学校学習指導要領（体育）の相撲の目標と内容

第1学年	押し出し遊び、片足ずもうをする。
第2学年	押し出し遊び、片足ずもうをする。
第3学年	中腰の構えて押しあいずもうをする。
第4学年	押しと突きを用いてずもうをする。
第5学年	しこ・伸脚・運び脚・攻めなどの基本動作をする。押しあい、突きあい、押しと突きを用いたずもうをする。
第6学年	しこ・伸脚・運び足・攻めなどの基本動作を行う。押しい、突きあい、寄りあいの練習をする。押し・突き・寄りをを用いたずもうをする。

部員が集まらず、やむなく休部や廃部に追い込まれるという話は、後を絶たない。しかし、多様化という現象は、スポーツ界だけでなく、我々の社会全般に起きている現象である。街を闊歩する若者のファッションは実にさまざまであり、その傍らを駆け抜ける車の種類も多彩となった。人の好みは広がり、その広がりに対応するように、色とりどりの商品が街にあふれている。反対に、それらの商品が人の好みをくすぐるようにして、購買意欲を助長する。スポーツ界もこうした社会の動きと決して無縁ではない。産業革命によって始まった近代社会は、大量生産を可能とし、それはやがて大量消費社会をもたらした。この大量消費社会の残り火は依然として燻っているものの、20世紀末に起こった高度情報社会は、急速にその残り火を絶やそうとしているように見える。高度情報社会は、個人であっても、情報の入手はもちろん、発信さえも容易にし、それによって価値観の多様化が進むこととなったのである。そして、この価値観の多様化は、我々の生活全般に及び、社会全体が大きく変化しようとしているのである。

2. ニュースポーツの台頭

ニュースポーツも、多様化という流れの中から台頭してきたといっている。

ニュースポーツとは、「ニュー（新）」と「スポーツ」を組み合わせた和製英語で、文字どおり、新しく考案されたり、新たに日本に紹介されたりすることとなったスポーツの総称である。また、その特徴は、競技性を重視せず、年齢性別を問わず誰でも参加できることを目的としている。ニュースポーツが取りざたされるようになった背景には、高齢社会が進み、生涯スポーツへの関心とともに、国民の健康志向が高まったことが挙げられる。

ニュースポーツといわれる種目を見ると、まさに多種多彩、一昔前ならとてもスポーツ競技とは思えないものも種目に名を連ねている（表2）。

しかし、各種目にはきちんとしたルールが定められ、それぞれの地域でリーダーが研修を行ったりして普及に努めている。

ニュースポーツが話題となったのはごく最近である。また、種目も数多くあるので、各々の種目への参加者は既存の競技と比較にならないほど少数である。しかも、参加者のなかには、ものめずらしさから参加している者も多く、固定した参加者が得られず、その活動が不安定な種目もあることだろう。しかし、スポーツの多様化とともに、国民の健康志向は今後、ますます高まることが予想され、ニュースポーツ全体への参加者は増えていくものと思われる。

誰でも気軽に参加でき健康を重視したニュースポーツの特性を考えると、激しいぶつかり合いが真骨頂の相撲は、ニュースポーツの対極にあるように見える。近年のニュースポーツの流行とは最も距離を置いているように見える。しかし、かつて相撲はどこでも簡単に行える競技として、とりわけ子どもたちにとって絶大の人氣があった競技（遊び）だった。特別な着衣を必要とせず、また、競技場である土俵は他のスポーツ競技と比較するまでもなく、極めて小さな面積でコト足りる。子どもの遊びとして相撲を行うなら、ちょっとした広場に手近な棒で円を描いて土俵とすることもできる。難しいルールもなく、特別なお金がかかるわけでもない。成人でも身体に自信があれば、日ごろ相撲の稽古をしていなくても、飛び入りで相撲を取ることもできる。「心技体」の充実を図ろうと激しい稽古に精進する上位を目指す選手とは別に、気軽に楽しめる競技として子どもから成人まで広く相撲が行われてきたのである。戦後の相撲人氣は、学校で相撲の授業を受けた子どもたちや、原っぱや公園の片隅で相撲を取って楽しんだ人たちが支えていたのである。こうした気軽に楽しめる相撲の持つもう一つの側面は、ニュースポーツと相反するものではなく、実はニュースポーツの特性につながるものだといってもいい。

ニュースポーツを楽しむ人は、おそらく、ひと

表2 ニュースポーツとされる競技

競技の型による分類	種 目
ターゲット (Target)	シャフルボード ダーツ ユニカール カーリング ホース シューズ 輪投げ プーメラン アトラックゲーム アク ラシー
ターゲットボール (Target ball)	ペタンク ローンボウルズ インドア・ローンボウルズ アソシエーション・クロッカー レクリエーション・クロ ッカー バンパー ゲートボール プロヴァンサル ボッチ ャー けん玉 ミニボウリング
ゴルフ (Golf)	ターゲットバードゴルフ グラウンドゴルフ ランボール クロッカーゴルフ ベビーゴルフ マレットゴルフ カント リーボール パットパットゴルフ パーリング パークゴル フ ディスクゴルフ
ウォールゲーム (Wall game)	ラケットボール スカッシュ フラッシュボール リコシェ ハイアライ バドルテニス バウンドテニス エスキーテニ ス テニスバット フリーテニス ハーフコートテニス プ ラットホームテニス テザーボール ラウンドテニス リン グテニス パンポン バスケットピンポン 円形卓球
スティックとボール (Stick and ball)	ユニホッケー クリケット カンガクリケット ストリ ートホッケー ボックスホッケー ブルームボール ラクロ ス シャトルボール
バレーボール (Volley ball)	インディアカ セバタクロー ネットボール(バレーボール 型) ビーチボール ソフトバレーボール
チーム・ボールゲーム (Ball game of team)	チュックボール ドッジボール ミニサッカー カヌーボロ ネットボール(バスケットボール型) アルティメット コ ーフボール
車輪 (Wheels)	一輪車 ダブリン グラススキー バイシクルモトクロス バイシクルトライアル マウンテンバイク スケートボード ランドヨット
屋外 (Outdoor)	ウォークラリー ウォーキング オリエンテーリング フ リークライミング アイスクライミング スノーボード ナスターレース パラグライダー 熱気球 ウェーブスキ ー ボディボード カヌー ボルダリング
複合 (Combination)	フライングディスク フットバッグ
格闘と力 (Combat and power)	カバディ 綱引き スマック アームレスリング

(『ニュースポーツ豆知識』とやま情報ネットワーク 2001年 より)

つの種目に打ち込むのではなく、そのときどきの気分に応じて、さまざまな種目を楽しむのではないだろうか。それほど、ニュースポーツの種目は数が多い。既存のスポーツ競技を気軽に楽しめるようにアレンジした新たなニュースポーツの種目が、今後も増えていくことだろう。競技人口の減少は早急に解決できる問題ではないが、スポーツの楽しむ人たちが、ひとつの種目だけでなく、複数の種目を楽しめるような環境を作り出すことができれば、限られた競技人口であっても、それらの人々はそれぞれの種目に重層的に振り分けられることになる。つまり、スポーツを楽しもうとする人たちを各々の競技種目で奪い合うのではなく、それぞれが分かち合うことになる。相撲に対して、かつてのような「一極集中」はもはや望むべくもない。しかし、かつてのように、どこでも気軽にだれもが楽しめる競技としての相撲が見直されるようになることは、それほど困難なことではないように思われる。

3. ボーダーレス化の進展

ニュースポーツの誕生と普及の背景には、高齢社会に呼応した国民の健康志向があるといったが、さらに忘れてならないのが、経済活動や生活活動ははじめあらゆる面でボーダーレス化が進んでいることである。ボーダーレス化はスポーツにおいても例外ではないのである。

たとえば、ニュースポーツのひとつとされるインディアカはもともと、アメリカのインディアンの間で行われていたものが、ヨーロッパでルール化され、最近我が国でも行われるようになった競技である。反対に、ゲートボールはクロッカーをヒントに、1947年我が国で考案され、現在は、我が国だけでなく、中国や韓国、ブラジルなどで行われるようになった。また、ダーツはイギリスで長い伝統を持つ競技であるが、同国の文化・メディア・スポーツ省は今年（2005年）3月、ダーツを正式にスポーツ競技と認めることとなった。こ

れにより、競技としてのダーツの地位とともに競技力の向上が望まれると、当事国のイギリスだけでなく、我が国のダーツ関係者も期待を寄せている。スポーツにおいても、国境のボーダーレス化とともにグローバル化の急速な進展は目をみはるばかりである。

こうした流れの中で、世界的規模で新たなスポーツ競技大会が行われるようになった。その代表といえるのが、今年（2005年）で第7回を数えるワールドゲームである。ワールドゲームは、4年に1度、オリンピックの翌年に行われており、ドイツのデュイスブルクで行われた第7回大会では世界100カ国から約3500人の選手が参加し、32種目で競技が競われた。その大会の様子は、さながら「裏オリンピック」の様相を呈している。ワールドゲームで行われる種目を見てみると、ビリヤード、ボディビルディング、ライフセービングなど、オリンピックの種目と比較すると、どうしてもマイナーな競技といわざるを得ない種目が並ぶ。オリンピックの種目が、世界的な規模で行われているメジャーな競技を参加種目の条件としていることから、両大会の種目の性格がそのようなになるのは当然であり、ワールドゲームの種目のなかには、将来オリンピックの正式種目として採用されることを期待して、暫定的にワールドゲームに参加している種目もある。そういう種目は、いってみれば、オリンピックの参加種目の予備軍といえるかもしれない。相撲人気の復活を掛け、オリンピックへの参加を悲願としている相撲もそのひとつである。

しかし、ワールドゲームの開催が7回を数えるようになると、いつまでもオリンピックの予行演習のような大会でよいのかどうか、疑問に思われてくる。それぞれの種目はオリンピックと比較すればマイナーな競技であることは事実であるが、四半世紀を超える歴史を持つ大会となれば、ワールドゲームが独自の主張を持ち始めてきても不思議ではない。ワールドゲームは競技人口が少ないだけに、世界中から選手が集い、競技そのものを

競い楽しむという点では、決してオリンピックに引けを取らない。マイナーであるがゆえに、選手たちは、オリンピックのように国を背負って出場してきているというよりは、4年に一度、世界の選手たちと、日ごろのトレーニングの成果を純粋に戦わせたいという気持ちのほうが強いのではないだろうか。そして、もはやそこには、競技種目がメジャーであるか否かということに価値が置かれなくなっているように思われる。

ワールドゲームとは別に、マイナーなスポーツであることにこそ競技の存在価値があると主張して開かれている世界大会に、世界伝統スポーツ・ゲームズフェスティバルがある。このイベントは世界各地の民族固有の伝統スポーツなどが一堂に会して開催されているもので、第1回は1992年にドイツのボンで開催された。このイベントも4年に一度開催されることになっており、過去には、日本から流鏝馬や古武道が参加している。第4回は2004年におよそ70カ国から選手が参加してカナダのモントリオールで開催予定となっていたが、残念ながら資金難から開催が中止された。しかし、イベントの開催は中止されたものの、人々はそれぞれの地域で生まれた伝統的なスポーツを、思い思いに楽しんでいることに変わりはない。オリンピック競技のような華々しさはなくとも、伝統スポーツへの特別な思いは、オリンピック選手には決して味わえないものであろう。このようなイベントとしては他にも世界伝統武術フェスティバルなどがあり、近年になってつぎつぎと開かれる新しいスポーツ競技大会を見ていると、世界的規模でマイナーな競技が、マイナーであるが故に持つ独自の価値を主張し始めているようではないだろうか。そして、相撲人気が低迷する中、今後相撲がどのような道を進むべきかを考えるとき、こうした世界的な新しいスポーツの潮流は、大きな示唆を与えているように思われる。

相撲は長い歴史を持つ我が国独自の伝統格闘技である。そして、相撲の世界は、洗練された日本の伝統文化そのものでもある。そこには、人気が高

いか否か、メジャーであるか否かという価値とはまったく別の世界が展開しているのである。まず、我々はそのことを見つめなおし、それを次代を担う世代に伝えることこそ、新しいスポーツの流れに沿うものだと思う。明治初期、社会全体に西洋化の波が押し寄せせる中で、かたくなに伝統に固執して相撲の存続を保ったように、相撲が本来の姿を取り戻す絶好の時代となったといえないだろうか。

4. 広がるスポーツの意義

近年のスポーツの流行などを見ると、国民のスポーツに対する考え方が大きく変化してきたことに気づかされる。

近代におけるスポーツとは、あくまでも競技であり、その結果としての記録こそが価値を持ち、それゆえに競技に勝つために懸命に練習を積み、自己の能力の限界に挑戦することであった。したがって、そうしたことをする人が真のスポーツマンであり、それ以外の人々がスポーツを楽しむというのは、スポーツマンたちの熱い闘いを観戦することだった。いってみれば、近代におけるスポーツとは「非日常性」に身を置いた世界であり、「日常」の世界に身を置いた一般の人々は、スポーツの観戦をとおして「非日常性」を楽しんだのである。だから、その真似事をするのは「日常」の世界の中の遊びであり娯楽でしかなかった。

ところが、スポーツの概念が大きく広がり、それにとまって、以前ならスポーツとはとてもいえないようなものまでがスポーツとみなされるようになった。

たとえば、散歩である。散歩は日常生活の中のひとこまにすぎず、一昔前ならばスポーツの範疇に入れる人は、おそらくいなかったであろう。しかし、後述するように、散歩が今最も人気のある「スポーツ」の一つとして、国民の間で定着しているのである。今や、スポーツ現場における「日常性」と「非日常性」の境界があいまいになって

きている。「日常性」と「非日常性」のボーダーレス化である。

総務省が行った2001年の社会生活基本調査（注3）によると、「スポーツ」を行った人の種類別を見ると、「運動としての散歩・軽い体操」が4812万4000人（行動者率42.6%）と最も多く、次いで、「ボウリング」が2607万4000人（23.1%）、「水泳」が2236万1000人（19.8%）、「つり」が1607万4000人（14.2%）となっている。また、1年間の平均行動日数を「スポーツ」の種類別に見ると、「運動としての散歩・軽い体操」が99.4日と最も多く、次いで、「ゲートボール」が60.6日、「ジョギング・マラソン」が58.0日という調査結果が出ている。年齢別に見ても、10代では、「水泳」、「ボウリング」、「運動としての散歩・軽い体操」、「ジョギング・マラソン」、「野球（キャッチボールを含む）」の順で、20代では、「ボウリング」、「運動としての散歩・軽い体操」、「スキー・スノーボード」、「水泳」、「つり」の順で、それぞれ行動者率が高くなっている。

この調査結果から、健康志向を目的としてスポーツを行う人が多いことが読み取れる。また、ニュースポーツが台頭してきたことも納得される。しかし、それ以上に注目されるのが、「散歩」や「ボウリング」、「つり」、「ゲートボール」などがスポーツの行動者率の上位を占めている点である。しかも、10代、20代の若い世代でも、これらがスポーツ行動の上位に顔を出している。これらが「スポーツ」の範疇に入るかどうか、疑問を呈する人も少なくないと思われるが、この調査では、「スポーツ」として扱っており、調査に回答する国民もまた、それらを「スポーツ」として回答していることから、一般的なスポーツと考えられているのは、紛れもない事実である。

一時期、相撲がスポーツであるかどうか、議論されたことがあった。相撲がスポーツでないという論点は、「より速く、より高く、より強く」なることに集約された競技としてのスポーツに、「礼に始まり、礼に終わる」ことが大前提である

相撲はなじまないというものであった。そこには、日本の伝統文化として営々と続けられてきた相撲が、日本に入ってきて高々100年余りにしかならない西欧のスポーツの色に染まってよいものかという自負とも懸念ともつかぬ思いがあった。勝敗の行方は、相撲のほんの一面を示すだけで、相撲はもっと大きな広がりを持っているというのである。

しかし、これらの議論も、近年のスポーツの多様化を考えると、一種の懐かしささえ覚える。スポーツの概念が広がり、好むと好まざるとにかかわらず、国民の間では、相撲もスポーツそのものであると、もはや決着がついてしまったように思われる。大きく広がったスポーツの概念が相撲をもそのなかに飲み込んでしまったといえる。

しかし、これによって、相撲の特性が失われるわけではない。相撲はスポーツの多様化の中で、その特性を大いに発揮すればよいのではないだろうか。各々が寄って立つところにしっかりと軸を置き、各々の特性を発揮することによってこそ、多様化の望ましい姿が現出すると思われる。

おわりに

大学の相撲の授業で、学生たちに廻しを締めさせると、皆一様に目を輝かせ、早く土俵に上がって相撲を取りたい気持ちにかきたてられる。塵手水や四股を踏む動作には、新鮮な驚きを隠さない。それらの意味も素直に納得する。新相撲では、レオタードの上から廻しを締めている。また、彼女たちは、倒れたときに痛くても、マットの土俵より、土の土俵で相撲を取ることを希望する。学生たちは、相撲の授業をとおして、文字どおり、日本の伝統文化を身をもって体験するときである。価値観の多様化は、我々の生活のすべてに及んでいる。そんな中で、物珍しさや華々しさから一時、注目を集めるとしても、見かけだけのうすっぺらなものは、やがて時とともに消えていくことだろう。しかし、相撲は、価値観の多様化の時代にこそ、燦然と輝く奥深さと広がりを持っている。

- 注1 子どもの数が高齢者人口よりも少なくなった社会
注2 ある一年間において、再生産年齢（15～49歳）にあたる女性の出生率を年齢ごとに計算し、それらを合計したもの
注3 日々の生活における「時間のすごし方」と1年間の「余暇活動」の状況など、国民の暮らしぶりについて、総務省が5年ごとに行っている調査で、最新の調査は2001年のもの

参考文献

- 『図説スポーツ史』寒川恒夫編 朝倉書店 1991年
『相撲—英文解説付き』下川隆司編 あき書房 2002年
『チカラビトの国』乃南アサ著 毎日新聞社 2001年
『力士たちの心・技・体』林盈六著 法研 1996年

(推薦評議員：ニッ森 修)